

2. 限界突破キャンプ事業の内容

【ファイナル】旅立ちのステージ

④ ファイナルステージのねらい

全日程をやり遂げたという達成感を味わい、これまでの自分と今の自分の変化や成長を見つめ、今後の自分の生き方について考えていく。

8月9日 キャンプのまとめ(発表)・お別れパーティ(野外炊事・キャンプファイヤー)



キャンプのまとめでは、6日間で経験したことから学んだことやできるようになったこと、そして今後どのように生かしていきたいかなどについて、しっかりと振り返ることができました。お別れパーティでは、共にやり遂げ、思いを共有してきた仲間と楽しく過ごすために、自分たちで進行や内容を考えながら活動することができました。一人一言の場面では、自然と笑顔、そして涙がこぼれてきました。

【ふりかえりカードから】

- 〈挑〉 全員でお別れパーティを成功させ、おいしいご飯を作ることができた。(小5男)
- 〈協〉 野外炊事やキャンプファイヤーにおける役割分担を、みんなで考えながら進めることができた。(小6女)
- 〈発〉 初日と比べて、絆や友情が深まっていたことを改めて発見することができた。(中2女)
- 〈相〉 お別れパーティの準備を率先してやってくれた。(小6男)

8月10日 閉会式(振り返り・決意表明)



キャンプ最終日。お世話になった宿泊棟の清掃、心を込めてきれいにしていきました。7日間の振り返りでは、テーマである、「挑戦・協力・発見」について考えたり、キャンプ中に起こった様々なことを思い出したりしながら言葉を綴りました。閉会式では、保護者の皆様に見守られながら、キャンプの全日程を最後までやり抜いたことで得られたこと、そして、その学びを今後の人生にどう生かしていきたいかなどについて、自信に満ち溢れた言葉で堂々と発表しました。これからの生活へと自信を持って旅立っていきました。

【ふりかえりカードから】

- 〈挑〉 1週間で9つの山を登ることができて、自分の自信へとつながった。(小5男)
- 〈協〉 一人ではできないようなことでも、みんなで協力し合えばできるようになることがわかった。(小6男)
- 〈協〉 チームの仲間を助けたり役割を分担したりしながら、協力して取り組むことの大切さを学ぶことができた。(小6女)
- 〈発〉 普通に生活していたら出会えない人たちと一緒に過ごすことで、最高の思い出になったとともに、自分の良さに改めて気づくことができた。(中2男)

3. 調査結果

(1) 自己肯定感とやり抜く力の変容

國學院大學人間開発学部 青木康太郎

破キャンプの教育効果を検証することとしました。

1. はじめに

限界突破キャンプでは参加者の自己肯定感ややり抜く力の育成をねらいとしていたことから、本稿ではそれらの変容に着目し、限界突破キャンプの教育効果について検証を行いました。

自己肯定感の測定には東京都教職員研修センター(2010)が開発した「東京都版自尊感情測定尺度」、やり抜く力の測定には山北ら(2018)が作成した「日本語版子ども用8項目のGrit尺度」を用い、キャンプの事前、事後、1ヶ月後に調査を行いました。分析に当たっては、自己肯定感ややり抜く力の回答を得点化し、それらの平均と標準偏差を基に測定時期間の効果量(cohen's d)を算出して教育効果を検証しました。

(2) キャンプ体験と自己肯定感、やり抜く力の変容

キャンプ体験の多寡で効果量を比較すると、他者協力体験や自己開示体験、自己注目体験(自己肯定感を多くした参加者は、キャンプ後、自己肯定感(d=.24, d=.31, d=.31)、やり抜く力(d=.38, d=.29)が高まる効果がみられました。さらに、自己開示体験と自己注目体験では、1ヶ月後も自己肯定感の効果量(d=.25, d=.27)が認められました。

(3) 人とのかかわりと自己肯定感、やり抜く力の変容

人とのかかわりの多寡から効果量を比較すると、人の役に立っていると感じたことが多かった参加者は、キャンプ後、自己肯定感(d=.23)ややり抜く力(d=.37)が高まる効果がみられ、その効果(d=.35, d=.41)は1ヶ月後も認められました。また、自分のいいところやがんばりを褒められたこと、自分の努力や工夫が認められたことが多かった参加者は自己肯定感(d=.63, d=.43)、人から感謝されたことが多かった参加者はやり抜く力(d=.39)が高まる効果がみられ、それらの効果は1ヶ月後も認められました。

2. 分析結果

(1) 自己肯定感、やり抜く力の変容

自己肯定感とやり抜く力の得点の推移は図1のとおりです。各測定時期間の効果量(d)をみると、自己肯定感、やり抜く力ともに効果量(効果量の目安 .20=小 .50=中 .80=大)が小さく、限界突破キャンプによる教育効果は確認できませんでした。

そこで、キャンプでの様々な体験(挑戦・達成体験、他者協力体験、自己開示体験等)や人とのかかわり(褒められた、感謝された、役に立っている等)を切り口に、それらの多寡から効果量を比較することで、限界突

3. まとめ

参加者全体でみた場合、自己肯定感ややり抜く力の教育効果はみられませんでした。他者協力や自己開示といった体験や、人の役に立つ、褒められるといった人とのかかわりを多く経験することで、自己肯定感ややり抜く力が高まる可能性があることが示唆されました。今後、プログラムの改善を検討する際は、他者と協力する場面や自己と向き合う機会を増やすとともに、人の役に立つ、人から褒められる、感謝されるといった経験がたくさんできるように活動内容を工夫したり、指導者の関わり方にも留意することが大切だと考えます。

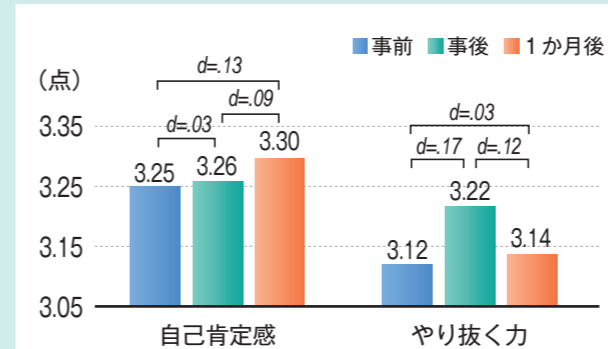


図1. 自己肯定感とやり抜く力の変容